

文学部教職課程

教授 今井 航
講師 針塚 瑞樹

1 アンケートの実施目的

教育実習を終えた教職課程履修者に対して、平成28年11月18日（金）に1回目の事後の指導が行われた。その際、アンケートを実施した。本アンケートは、平成19年度から実施しており、今回で10回目となる。ただし、平成27年度の9回目のアンケート結果は、まとめることができていないため、この『教職への道』に未だ掲載されていない。

教育実習の内容はどうであったか。また、実習を終えてどのような変化があったか。今回も、彼らが自らどのように評価しているのかを答えてもらった。

2 方法

当日は、44名の履修者が対象となった。アンケートの内容は、大きく分けて教育実習に関する評価と自己評価の2点であった。いずれも5段階評価を採用した。5段階は、以下のように設定した。

5 強くそう思う 4 そう思う 3 どちらともいえない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

上記1から5までのうち、1つだけ該当する数字を選び、これに○印を付けてもらった。また、その他として主に公立学校教員採用選考試験に関する事項を調査した。さらに、教職課程への要望を自由に記述してもらった。以下の通りである。

I. 教育実習に関する評価

| | | | | | |
|--------------------------------|---|---|---|---|---|
| ①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

II. 自己評価

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③大学卒業後は、教職関係(公/私立の臨時的任用教員、塾講師など)に就職したい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

III. その他（YesかNoのどちらかに○印を付けてください）

| | | | |
|------------------------------------|-----|---|----|
| ①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。 | Yes | • | No |
| ②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。 | Yes | • | No |
| ③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。 | Yes | • | No |
| ④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。 | Yes | • | No |

上記Ⅲ. ②でYesと回答された方は、受験した都道府県名、或いは都市名を下のカッコ内に全て記して下さい。
()

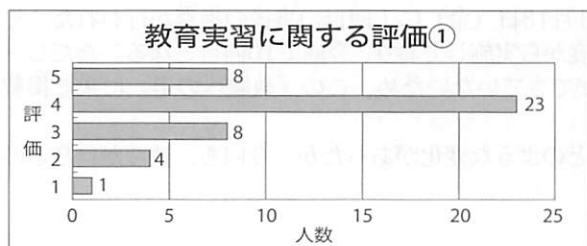
IV. 教職課程への要望（下の空欄に、実習の事前・事後の指導や講義・演習のことなど自由に書いてください）

3 アンケート結果

それでは、項目ごとに結果を見てみよう。

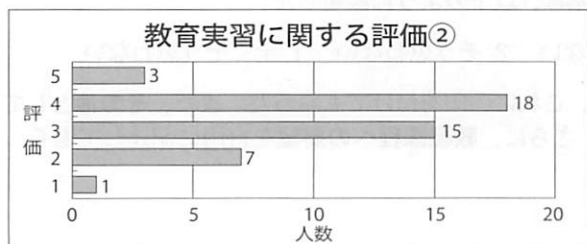
I. 教育実習に関する評価

①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。



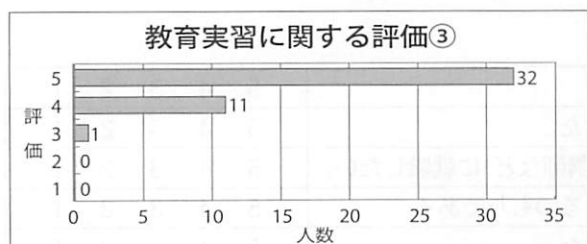
31名（70%）が十分に教材研究を行い、授業にのぞんだとしている。

②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。



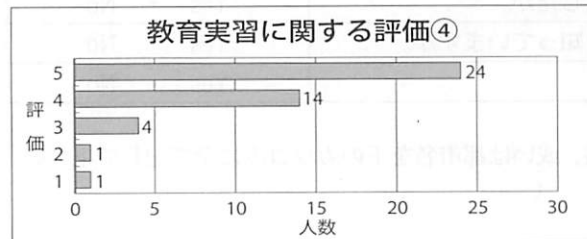
学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができたとする者は21名（48%）である反面、23名（52%）がどちらともいえない、あるいは思い通りにはいかなかったとしている。

③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。



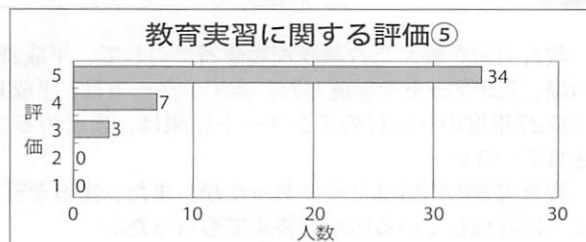
43名（98%）が熱意をもって、教育実習に取り組んだとしている。

④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。



38名（86%）が積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかったとしている。

⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。



41名（93%）が遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守ったとしている。

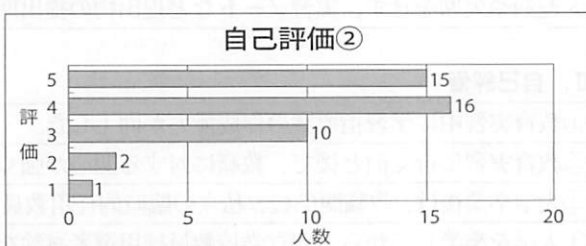
II. 自己評価

①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。



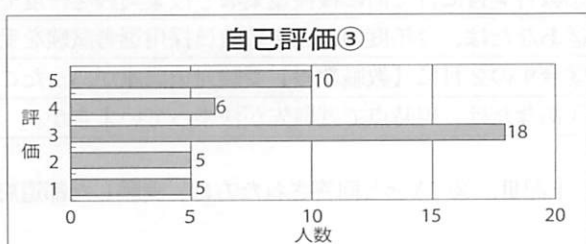
37名（84%）が教育実習中に学習指導案の作成能力が向上したとしている。

②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。



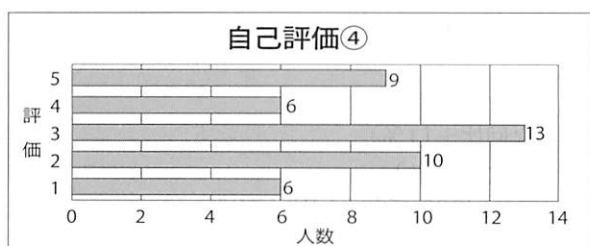
31名（70%）が教育実習に行って教職に対する関心が強くなったとしている。

③大学卒業後は、教職関係に就職したい。



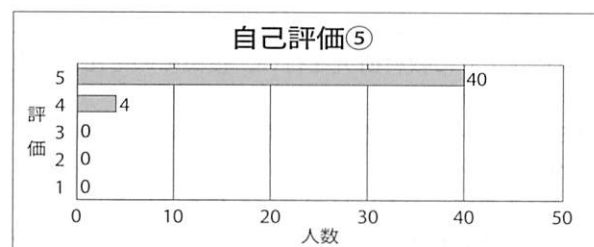
大学卒業後は、教職関係に就職したいとする者は、16名(36%)である。18名(41%)がどちらともいえないとしている。

④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。



大学を卒業してからも、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりの方は、15名(34%)である。

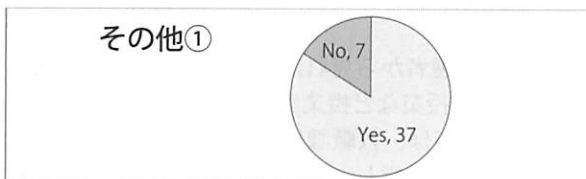
⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。



49名(100%)が教育実習はこれからの人生にとって貴重な体験となったとしている。

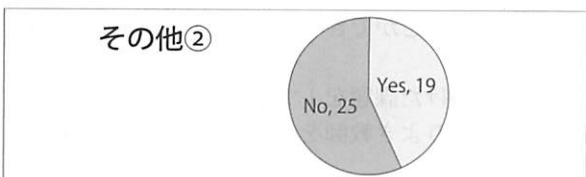
Ⅲ. その他

①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。



授業実践を一度でも経験してから教育実習に行った者は、37名(84%)である。

②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。



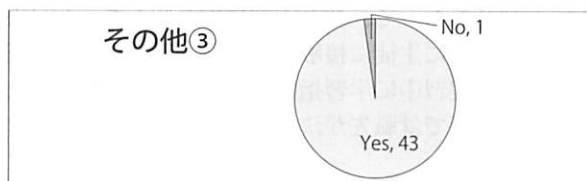
今年度の公立学校教員採用選考試験を受けた者は、19

名(43%)である。

また、受験先の内訳(延べ19)は、以下の通りである。

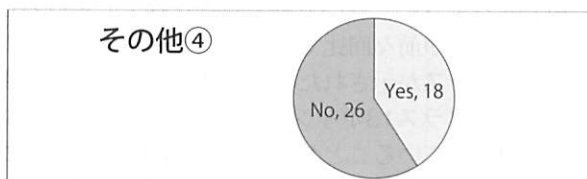
| | | |
|-----|-----|------|
| 福岡県 | 福岡市 | 北九州市 |
| 2名 | 2名 | 1名 |
| 大分県 | 長崎県 | 熊本県 |
| 12名 | 1名 | 1名 |

③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。



今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていた者は、43名(98%)である。

④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。



平成28年11月18日(金)の時点で就職先が決まっている者は、18名(41%)である。

Ⅳ. 教職課程への要望

各教科教育法の開講時期、あるいは「実習指導」・「教職実践演習」で行われている教育実習報告会の報告者人選の在り方や同じくパネルディスカッションの議論の仕方、さらには教員採用選考試験の受験対策のなかみ等に関する指摘が見られた。

報告者人選やパネルディスカッションのことは、さっそう平成29年度に改善を図る予定である。また、教員採用選考試験の受験対策は、1次・2次の両試験対策、あるいは教職と専門の両教養対策などのように分けて捉える必要がある。すでに学内で実施されている取り組みを継続しながら、今後は学外で実施されている「民間」の当該対策講座の受講を勧めていきたい。

さらに、教育実習がほぼ終わった後の4年後学期で教科教育法が実施される場合の是非が問われていた。教育実習に臨む準備の場であると捉えれば要望は理解できるが、別に教育実習が終わった後の振り返りとしての学習・研究の場であると捉えれば問題はない。養成段階の各教科教育法のもつ意味を再度おさえておきたい。

4 まとめ

冒頭でも述べたように、今回は本アンケートを実施し始めてから10回目となる。今回の結果は果たしてどうであったか。特徴を見るため、項目ごとに以前の結果と比べてみた。平成27年度の9回目の結果は未掲載である。そのため、ここでは前々回8回目の結果と比べてみることにした。

前々回に比べて肯定的な回答の割合が大なり小なり増加している。10ポイント以上のプラスが見られた点に着目すれば、以下の通りである。

- I—①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。(今回70%で前々回比+11%)
- I—③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。(今回98%で前々回比+10%)
- I—④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。(今回86%で前々回比+13%)
- II—①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。(今回84%で前々回比+13%)
- III—④現時点で就職先が決まっている。(今回41%で前々回比+12%)

「学問的真理探究の徒としての教師」を養成することが本学の教職課程では目指されている。いったい各学部・各学科における学習・研究の成果は専門教科における学習支援と如何に結び付くのだろうか。「1を知っていれば1を教えられる」は大きな勘違い」と指摘されている(安河内哲也『できる人の教え方』(中経出版、2007年7月、20頁)。1を教えるために100に値するような教材研究に取り組みたい。たくさんの結び付きに気づくことができるように、専門分野で真理を探究し続けることである。「十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ」とする者の割合が前々回比でプラス11ポイントであった。今後も期待したい。

同様にプラスが示されたのは「積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった」とする者の割合で、前々回比でプラス13ポイントであった。本冊子掲載の「教育実習の報告」(12～22頁)を読むと、生徒との関係が重視されていることが分かる。実践例も具体的に記されているので、おおいに参考にしてもらいたい。

一方、とくに従前6～8回目の結果から、本学の教職課程履修者は教育実習中に「思い通りに授業をすることはできなかった」と振り返っている者が多いと見られてきた。たほうで今回の結果では「教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した」とする者の割合が前々回比でプラス13%であったことは評価される。「学習指導案の作成能力は向上していると思われるが、思い通りに授業をすることができない」とき、どのように振り返ることができるのだろうか。武井真由美氏は本冊子で御自身の経験をもとに1つの振り返り方を示している(7頁2列32～38行目)。ぜひ参考にしてもらいたい。

平成29年度以降に教育実習に臨む教職課程履修者は、こうした先輩たちの結果を踏まえて、早めから教材研究や学習指導案の作成に取り組んでももらいたい。

「大学生」であるとは言え、学校現場にひとたび入ったら、生徒や保護者から見れば「教師」である。授業自体の質的な向上も目指していきたい。III—①で教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験したことがあると回答した者の割合は84%(前々回比+6%)である。本学では、教職課程履修者全員が授業実践をしてから教育実習にのぞむことを強く勧めている。「教師」であることを自覚し、授業自体の質的な向上を目指し、前もって授業実践に取り組んでももらいたい。

また、今年度の教員採用選考試験の受験者の割合は大きく低下した(III—②・前々回比-12%)。同時に、就職先が決まっている割合が高まったせい(上記III—④)、大学卒業後の教職関係への就職希望者、おなじく卒業後の教員採用選考試験の受験希望者の各割合も大きく低下した(それぞれII—③・前々回比-11%、II—④・前々回比-17%)。教職関係に就かないとはいえ、教育職員免許状を取得しようとする者として教職課程履修者全員に受験を勧めたい。受験してこそ、教員としての資質・能力を問うことができるし、よりいっそう自らの立ち位置と進むべき道が明らかになるだろう。

本学教職課程のどこに課題があるか。今後も真摯に問いながら、見つけた課題を1つ1つ解決していくつもりである。教職課程履修者とともに改善に努めながら、1人でも多くのよりよき教師を、この「別大」から輩出していきたい。